〈論文翻訳〉

『ケルン社会学・社会心理学雑誌』(*KZfSS*)にみる社会学の歴史（下）

シュテファン・メビウス
梅　村　麦　生　訳

（上）目次

1　はじめに
2　『ケルン社会学四季報』（*Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie*）の制度化
3　ヴァイマル共和国における社会学の雑誌界
4　知識社会学論争と「新しい社会学の波（neue soziologische Welle）」
5　ケルン研究所の廃止と『四季報』の休刊
6　1945 年以後――雑誌の再刊と西ドイツ戦後社会学の中心的主題

（以上、『京都社会学年報』26 号掲載）

7　1955 年以後の『ケルン社会学・社会心理学雑誌』

1950 年代が過ぎるうちに、西ドイツ社会学の中心的な学派の間での差別化と争いがますます目立つものとなっていった（参照、Moebius 2015: 17-18）。社会の諸過程と諸問題の評価や、各自の分野の基礎（哲学的な基礎か経験的な基礎か）に関する評価のなかですでに違いが存在していたが、その違いが拡大し、定義権力（Definitionsmacht）や代理権力（Repräsentationsmacht）をめぐる闘争へと強化されていった。ルネ・ケーニヒが 1955 年に当時の誌名で『ケルン社会学雑誌』（*Kölner Zeitschrift für Soziologie*）の編集発行を引き受けたとき、彼はすでに国際的に知られており、最初の国際社会学会（ISA）大会を組織していた（1962-1966 年にケーニヒはその会長を務め、今日に至るまで唯一のドイツ人会長である）。そしていよいよ「量的な経験的社会調査の偉大な伝播者」（Scheuch 2001: 144）へと登りつめていった。社会学界でのケーニヒと彼の「学派」の地位は、この雑誌

によって強化された（参照、Moebius 2015）。ケーニヒはトゥルンヴァルトから示唆を受けてこの雑誌を『ケルン社会学・社会心理学雑誌』と新たに命名したが、その理由は1955年の新編集発行人まえがきに書かれているように、ケーニヒの社会学理解では「パーソナリティ、社会、文化」は一つの「統一的な連関」をなしており、「人格（パーソン）」とともに社会心理学的な要素もきわめて重要になることによる（参照、Moebius 2015: 59以下）。しかしケーニヒがインタビューのなかで明らかにしているように、ここで言う社会心理学は個別ディシプリンではなく、「社会学の社会心理学的な基礎づけ」を意味しているという（参照、Neumann und Schäfer 1990: 236）。ケーニヒが念頭に置いていたのは、若手学者たちも取り上げられる「社会学の総合的な専門機関誌」としての雑誌であった（König 1955: 1-5）。

ケーニヒ主導の編集発行体制によって、経験的研究への割り当ては大きく増加した。ケーニヒはこの雑誌に加えて、新たな主題領域を切り開いたりあるいは甦らせたりする、特別号（Sonderheft）と特集号（Schwerpunktheft）を導入した。ケーニヒが編集発行人を引き受けてまもない1956年に最初の特別号が地域社会学を主題として公刊され、その後も毎年特別号が公刊されている（本号所収のDreier [2016] 2017のリストを参照）[20]。この雑誌は、1965年までドイツ社会学会の公式機関誌でもあったが、そのことによっていわゆる「ケルン学派」の要石となるのみならず（参照、Moebius 2015: 111以下）、たちまちドイツ語圏の最も重要な社会学専門誌と国際的にも見なされるようになった。競合するプロジェクトは、1949年創刊の『社会的世界』（*Soziale Welt*）と、1970年代初頭からの『社会学雑誌』（*Zeitschrift für Soziologie*）である。

1955年以降に当誌に掲載された論文をより詳しく見てみると、1960年代初頭までにさまざまな重点設定を見出すことができる（参照、Lüschen 1979）。それらの重点設定は、社会学界の力学にも社会事情にも関わっている。上述のように、特に大きな関心が向けられていたのは、産業社会学、地域社会学、家族社会学、青年社会学、そして社会階層の問題に対してであった（Nolte 2000: 267以下も参照のこと）。しかし、社会学や経験的社会調査の位置づけ、そしてそれらのさらなる発展と専門職化にも焦点が当てられるようになった。ケーニヒは1952年と1956年に、インタビュー、観察、実験を扱った『実践的社会調査』（*Praktische Sozialforschung*）の2巻本を刊行した。続けて1958年にはフィッシャー辞典〔ルネ・ケーニヒ編『社会学』（*Das Fischer Lexikon*, Bd.10, *Soziologie*）〕が刊行され、社会学のベストセラーの一つとなった。また1960年代初めからケーニヒは、

[20] 1960, 1973, 1985, 1991の4年だけは特別号が公刊されていない。

多数の巻からなる『経験的社会調査要覧』（*Handbuch der empirischen Sozialforschung*）を刊行している。リュッシェン（Lüschen 1979: 174）はドイツの社会学雑誌を分析するなかで、1950年代半ばから1962年までの初期の時代を「半理論的な議論と社会的関連のある経験的研究の段階」と特徴づけている。シェルスキーの論文やケーニヒの数多くの活動は、当時の経験的研究との関わりと方法論的な議論の事例のごく一部にすぎない。本号に再録したゲアハルト・クライニングとハリエット・ムーアによる社会階層測定の新たな方法としての「社会的自己分類（Soziale Selbsteinstufung [SSE]）」に関する論文〔Kleining und Moore 1968〕は、社会階層への関心が続いていることを示しており、さらなる専門職化の試みの一例である。その際にこの論文は1960年代半ばから方法論的な問いと専門職化の試みに、単に抽象的にではなく、ますます例えば社会階層のような具体的な主題と問題領域に基づいて取り組まれるようになったということも示している。

8 『ケルン社会学・社会心理学雑誌』における西ドイツ社会学の中心的論争

しかし、以上のような特に経験的研究に関わる論考に加えて、1950年代の終わりから、社会学界のさらなる分出と反省段階をはっきりと示した、より理論的で科学論的な議論も行なわれている。そうした西ドイツ初期の社会学の中心的な論争の二つを『ケルン雑誌』のうちに見出すことができる。つまり、役割論争と実証主義論争である。

ケーニヒによる編集発行体制になって以降の『ケルン雑誌』で、最初の見所かつ衝撃を与えたものの一つが、当誌で1958年から公刊され、本号に再録したラルフ・ダーレンドルフの『ホモ・ソシオロジクス』〔Dahrendorf 1958［=1973］〕であり[21]、このテクストによって若干29歳のダーレンドルフがいわゆる役割論争を巻き起こした（参照、Fischer 2010; Moebius 2016）[22]。このテクストはタルコット・パーソンズ批判の一つであり（参照、Abels 2010: 116以下）、ダーレンドルフが1955年に『ケルン雑誌』ですでに公刊していた論文「構造と機能――タルコット・パーソンズと社会学理論の発展」に基づいている。ダーレンドルフは構造機能主義に表されている、社会変動もコンフリクトも知らないホモ・ソ

---

[21] 同年にダーレンドルフは、シェルスキーの支持のもとハンブルク公共経済アカデミーの教授になっている。

[22] これが西ドイツ社会学の最初の論争というわけではない。1950-51年と、続いてその後1958-59年に、ドイツにおける社会学の組織的代表と制度化に関して別の激しい論争があった。その論争はドイツ社会学会と国際社会学協会（Institut Internatinoal de Sociologie）の間で行なわれ、「社会学における内戦」という概念のもとで知られている（参照、Weyer 1986）。ここではさしあたり、1945年以後の社会学の論争に関する筆者の論考（Moebius 2016）とKneer und Moebius（2010）を引いておく。ダーレンドルフの『ホモソシオロジクス』については、Abels（2010）の示唆に富む論考を見よ。

シオロジクス（homo sociologicus）という人間像と社会像を特に批判している。しかしダーレンドルフは単なるパーソンズ批判を超えて、同時に役割理論全体を攻撃している。とりわけ、「社会と社会学の立場」から出発すると「役割期待の学習［は］人間が自己をホモ・ソシオロジクスへと疎外することによって、彼をはじめて社会や社会学から接近可能なものにし、そうすることで彼に意味を付与する事柄［である］」（Dahrendorf 1958: 348 [2017: 189]〔=1973: 88〕）というダーレンドルフのテーゼが、議論を呼び起こした。「役割のない人間は、社会と社会学にとっては実在しないも同然の存在（ein nicht existierendes Wesen）である」（Dahrendorf 1958: 348 [2017: 190]〔=1973: 88〕）。ダーレンドルフ（Dahrendorf 1958: 349 [2017: 190]〔=1973: 93〕）はホモ・ソシオロジクスという、人間を社会の成員と見なす、つまり彼の言う「社会という腹立たしい事実（ärgerliche Tatsache der Gesellschaft）」の成員と見なす社会学的なまなざしを、役割行動以上のものである「［われわれの］経験する全体的人間」と対比させた（参照、Abels 2010: 131）。この役割行動以上の存在という考えはもとをたどれば、個人が自身の個別性によって社会関係を超え出るという、ゲオルク・ジンメルの社会学的アプリオリを引き継ぐものである。

ダーレンドルフの論文が不興を買ったのは、第一に一方の個人的で社会から離れた自由と他方の社会によって規定されていることとをおおざっぱに対比したことと、第二に不可避的な疎外というテーゼに対してであった（参照、Joas 1978: 18 以下）。例えばフリガ・ハウク（Haug 1972）はダーレンドルフの一般的な疎外テーゼに、より悪い社会とより良い社会とをもはや区別しえないとする典型的なブルジョワ・イデオロギーを見出し、同様にケーニヒ（König 2002: 24）は自由と社会を、そして個人と社会を対立させたことを批判した。ケーニヒによれば、個人はそもそも他者との共同生活によって初めて自由になる。ヘルムート・プレスナー（Plessner 1974: 30）も「社会的役割と人間的本性」〔1960〕のなかで類似の見解を示している。論争に加わった他の批判者は、アルノルト・ゲーレン、ヘルムート・シェルスキー、ハインリッヒ・ポピッツ、ハンス・パウル・バールト、ディーター・クレッセンス、フリードリヒ・テンブルック、ピーター・L・バーガーとトマス・ルックマン、そしてハンス・ペーター・ドライツェルとハンス・ヨアスであった（参照、Fischer 2010: 80-81; 各人の論拠については Abels 2010: 124 以下を見よ）。以上に挙げた人物たちはいずれも、ダーレンドルフの立場を共有しなかった。しかし役割論争は、ジンメルやミードのような社会学の古典家たちがドイツ語圏の社会学のなかで（再）発見されたり、あるいは例えばゴフマン受容が始まったりしたことにつながったのみならず（Fischer 2010: 91）、「社会学が 1960 年代初めに非アカデミックな公共圏をも惹きつけ［るに至る］」ことをももたらした。「というのも、役割概念は社会学的な分析手法と社会での《役割演技》

の反省とを生活世界へと接続する可能性を提供したからである」（Fischer 2010: 82）。

西ドイツ社会学で役割論争に続いて中心的な論争となったのが、実証主義論争であった。この論争は「『ケルン雑誌』上で 1962 年から 1968 年の間に公刊されたハンス・アルバート、ユルゲン・ハーバーマス、ハラルト・ピロート、K・R・ポパーの論文によって繰り広げられ、その後テオドール・アドルノによって補遺を加えられて一冊の本として」（Lüschen 1979: 171）公刊された。本号に再録したカール・ポパーの報告「社会科学の論理」〔Popper 1962［= 1992］〕は、1961 年にチュービンゲンで開かれたドイツ社会学会内部の研究会議で披露され、議論の出発点を形成した。しかしこの論争は根本的には、1930 年代と 1940 年代に行なわれたフランクフルト学派とウィーン学団の論理実証主義との間の論争にまで遡ることができる（参照、Dahms 1994）。

チュービンゲンで開かれた研究会議の目的は、ドイツ社会学会内部の意見の違いを議論し尽くし、「科学論的な議論によって客観化を行なう」（Lepsius 1979: 43）ことであった。この論争そのもののなかでは、本来の意味での実証主義について扱われることはほとんどなく、ポパーも実証主義のなかに数え入れることができないどころか（Dahm 1994: 332 以下 ; Ritsert 2010）、実証主義に対して明示的に批判的な主張を行なっていた。この論争のなかで問題になったのは、むしろ基本的に科学論的な問題と価値判断の問題であった。

アドルノとポパーの間で、そこまで遠く立場の隔たりがあったわけではない。一致していたのは、ケルン学派の科学主義とマンハイムの知識社会学を拒否したことである。その後、本来の意味での論争に至ったのは、アドルノが 1969 年に公刊された論集に寄せた不釣り合いに長い序文と「ポパー伝説（Popper-Legende）の復活」によってである。ポパー伝説とは、ポパーに対して実証主義との近さを言い立てようとするものであり、「彼〔ポパー〕が政治的な観点からも《実証主義者》であり、したがって《存立するもの》（社会の現状 status quo）を擁護する者であるかのような・・・ニュアンスをともなっていた」（Dahms 2008: 32-33）。

1961 年に選挙研究で大きな注目を集め、その後ドイツ社会学会の方法部門を設立したショイヒ（参照、Moebius 2015: 89）は、本号に再録した論文「社会変動と社会調査」〔Scheuch 1965〕によって、ケルン学派の側から実証主義論争に加わった。ショイヒはドイツとアメリカ合衆国の比較に基づいて、社会と経験的社会調査との関係を明確に論じ、経験的社会調査は「社会変動の帰結かつ動因」として現れうるとした（Scheuch 1965: 2 [2017: 245]）。したがってショイヒの主張によれば、経験的社会調査はけっして左派や右派の批判者たちの一部が考えたような順応主義の装置や、現状 status quo の維持装置ではなく、合理化と批判的変化の手段であるという。このことはケーニヒの立場のみならず、さらに遡ってエ

ミール・デュルケームによる方法的に合理化された批判的な社会の科学への信念を想起させる。したがって本号に再録したアドルノの「社会科学の客観性に関する覚え書き」（Adorno 1965）のなかで明らかになっているように、社会学界における論争のなかでデュルケームもまた「賭け金」となったことは不思議に思われない。アドルノはその論文のなかでデュルケームを現状肯定的（affirmativ）なイデオローグとして批判し、デュルケームのもとでは批判的な社会理論が分類的な概念図式に置き換えられているとした。この批判は間接的にケーニヒの「客観的な社会学の基礎づけ」（この表現はケーニヒの教授資格論文の副題である）にも向けられており、アドルノの側からデュルケームとの総決算を図る幕開けとなった。1967 年にアドルノはデュルケームの論集『社会学と哲学』〔ドイツ語訳版〕に寄せた序でデュルケームとさらに併せてケーニヒについても解体を試み（参照、Peter 2013）、それどころか修正社会主義者でモラリストのデュルケームをファシスト的なイデオローグへと近づけている。ケーニヒはこの言説政治的な策略に気づき、自身のデュルケーム解釈のなかでアドルノの誤った読解を入念に修正するかたちで応じた。

以上に挙げた諸論争は、「ドイツ社会学」の強化と「自己了解の過程」（Schmid 2004: 24）の中心的な契機となった。それらの論争はその後の数十年になされた議論の大部分に大きな影響を与え、「後期資本主義か産業社会か」論争や「ハーバーマス－ルーマン論争」を経て、1970 年代半ばの「理論比較論争」へと至っている（参照、Kneer und Moebius 2010; Moebius 2016）。それらの論争の影響は、今日に至るまで見出される（参照、Greschoff 2010: 210 以下）。

しかし、西ドイツ社会学の歩みを特徴づけたこれらの論争によって、他の対象や社会の問題状況へのまなざしがあったことを忘れるべきではない。1960 年代へと移るなかで、社会変動、社会移動、社会階層が社会学的研究の中心的な案件となった（参照、Lüschen 1979: 191, 注 29; Nolte 2000: 267）。リュシェンの分析とまた『ケルン雑誌』各特別号の表題も示しているように（参照、Lüschen 1979: 181, 表 2; Dreier 2016: 12, 付録 1）、その後の年代には政治（緊急事態法と《1968》によって始まった）、経済、組織、芸術、教育そして知識といった各領域の社会学、開発社会学、社会学理論とそれに結びついた古典家の再発見といった主題が重点的に続いている。政治という 1970 年代の大きな社会学的な問題設定を代表しているのが、例えば本号に再録したウルリッヒ・ベックとエリーザベト・ゲルンスハイムによる「学生騒動」についての論文〔Beck und Gernsheim 1971〕である。この論文は、社会科学における若年世代の「文化的新指向（kulturelle Neuorientierung）」の文脈に位置づけることができる（参照、Nolte 2000: 268）。その新指向はラルフ・ダーレンドルフがすでに示していたものであり、ノルテ（Nolte 2000: 268）に従えば、以下のキャッ

チフレーズで言い表される。つまり、調和と統合への憧憬を放棄すること、社会のさまざまなコンフリクト、力学、そして「利害対立の恒常的な発生」を認識すること、である。

9　古典家の再発見と社会学界における新たな（理論的）立場の確立

古典家の再発見を代表しているのは、ケーニヒによるデュルケーム受容や1960年代のマルクス・ルネッサンスに加えて、フリードリヒ・テンブルックによる一連の伝説的なマックス・ヴェーバー論文であり、そのうちの一つ〔Tenbruck 1975［= 1997］〕が本号に再録されている。テンブルックは特にヴェーバーの合理化テーゼを著作解釈の中心に据え、そのことによってヴェーバー受容全体を拡大した。というのも、テンブルックが1950年代にすでに発表していた他のテクストと併せて、『経済と社会』はヴェーバーの主要著作ではないとする彼の批判はヴェーバー社会学の別の見方へと、そしてついには新たな歴史的・批判的な全集の刊行へとつながったからである（参照、Homann 1999: XVIII）。テンブルックの論文よりさかのぼるさらに十年前にすでに、ハイデルベルクでヴェーバーに関する社会学者の会議が開かれていたが、その会議は共鳴をまだほとんど引き起こしていなかった（参照、Lüschen 1979: 175）。それに対して、テンブルックの受容を媒介としてヴェーバーは、1970年代終わりのドイツ文化社会学の復興にとって最も重要な古典家の一人となった（参照、Moebius und Albrecht 2014）。

古典家たちに期待された新たな刺激への需要は、合理化、機能分化、社会的解体とその結果としての新たなコンフリクトや問題認識といった社会の諸過程に由来するものであるとともに、こうした過程を適切に把握してきたとする既存の理論への不満の結果でもあった。批判は特に、ヘゲモニー的なものと見なされたパーソンズの構造機能主義に向けて発せられた。そのことを示す例が文化社会学の再建である。文化社会学は上述のように1970年代終わりからヴェーバーに目を向け、パーソンズ、マルクス主義、役割理論からは離れていくなかで、ルネッサンスを体験した（Moebius und Albrecht 2014）。しかしまた、理論の多様性の拡大は、1970年代半ばの理論比較論争のなかで露わになっていったように（参照、Greschoff 2010）、成熟したディシプリンを肯定的に示すものとしてではなく、むしろ実りのないものとしてより明らかに認識されるようになった。理論の多様性から帰結する新たな綜合（と社会学界での新たな位置づけ）への需要は、古典家たちやパーソンズと対峙するなかで現われてきた（参照、Joas und Knöbl 2004: 285, 351）。ここで特に考慮されるべきは、ユルゲン・ハーバーマス〔の『コミュニケイション的行為の理論』〕（Habermas 1981〔=1985-1987〕）やニクラス・ルーマンのシステム理論による、グランド・セオリー

である。彼らの理論は、1960 年代と 1970 年代にはすでに展開されはじめ、1970 年代初めにハーバーマス－ルーマン論争のなかで互いと対決した。本号に再録したルーマンの論文〔Luhmann 1978〕は、システム理論的な行為理解を展開したものであり、そのなかでパーソンズのシステム理論を受容すると同時にパーソンズ派の行為理論は拒否するという（Joas und Knöbl 2004: 355 も参照のこと）、パーソンズとの特異な関わりが印象的に現われている。

ノルベルト・エリアスの再発見もまた、社会学界でのそうした新指向の影響下にあり、レーベルク（Rehberg 1979: 113 以下）の詳細な受容分析によればもっぱらマルクス・ルネッサンスと「マルクス以後の議論（nach-Marx'schen Diskussionen）」（Rehberg 1979: 118）を背景として理解されるべきものである。つまり、エリアスの文明化の理論は、マルクス主義よりも「宥和的」に「史的唯物論的な批判が生き延びる」上での「避難所」と「媒体」となった。したがってエリアスの文明化の理論は、異なる理論的・政治的な陣営からの接続可能性にいっそう開かれていた。

文化社会学の復活やエリアス受容にも見出しうるように、古典家たちの再発見に結びついていたのは、社会学界での多様な新しい集団形成や位置づけの営みであった。それと並行して現われたのが、新たな綜合と差別化の試みである。本号に再録したハルトムート・エサーのエリアス論文〔Esser 1984〕は、そうした文脈のなかで理解されるべきである。エサーのその論文はエリアスのフィギュレーション社会学（Figurationssoziologie, FS）とエサーが好む分析的な科学理解や方法論的個人主義（Methodologischer Individualismus, MI）との間の一致や親和性を探っており、自身の理解が「この間に立派に確立されたエリアス教団（Elias-Gemeinde）からは拒否されるであろう」ということを認識していた（Esser 1984: 注 2 [2017: 457]）。エサーはフィギュレーション社会学と方法論的個人主義の間の親和性を指摘した後で、両者の驚くべき共通性を目の当たりにして、ついには方法論的個人主義に対するフィギュレーション社会学者たちの差別化実践がむしろ説明を要するものであると感じるようになった（Esser 1984: 695 [2017: 489]）。フィギュレーション社会学（FS）はその方向づけ仮説において方法論的個人主義とまったく一致しうることが明らかだというのに、なぜ自分たちの社会学理解の独自性を主張するのだろうか、とエサーは言う。もっとも、反対にエサーの理論戦略的な一体化の試みも同様に説明を要するものであり、おそらく詳細な界社会学的（feldsoziologisch）な分析に値するものである。

10　1980 年代

ケーニヒは 1974 年の定年退職後、1977 年から後任のフリートヘルム・ナイトハルトと『ケルン雑誌』の編集発行を行なった [23]。1979 年には 3 人目の編集発行人としてクリスティアン・ルッツが編集発行委員会に加わったが、同年に亡くなってしまった。ルッツの代わりに加わったのが M・ライナー・レプシウス（1996 年まで）である。ケーニヒは 1985 年に編集発行委員会から外れた。エサーは 1987 年から 1991 年の間に共同編集発行人を務めた。長く（1977 年から 2006 年まで）編集者を務めていたのがハイネ・フォン・アレマンである [24]。1980 年代終わりには学術顧問が導入され、初めは 5 人、1990 年からは 6 人で構成されるようになった（参照、Friedrichs ほか 1997: VIII; Dreier 2016: 6）。フリートヘルム・ナイトハルトは 1992 年まで編集発行人代表を務め、その後をユルゲン・フリードリヒスが継いで 2013 年まで務めた [25]。

今日まで続くこの雑誌の多産性は、ほぼ毎年 1 冊ずつ刊行されている特別号にも示されている。本稿〔(上)〕ですでに論じた社会学の歴史への振り返りは、特別号『1945 年以後のドイツ社会学』（Lüschen 1979, 特別号 21 巻）[26] と 1981 年に公刊された特別号 23 巻『1918-1945 年のドイツとオーストリアの社会学』（Lepsius 1981）に現われている。『ケルン雑誌』上に映る社会学の歴史を社会学史的に分析する上では、1980 年代の特別号に見られる対象領域も興味をひく。まず扱われたのは、経済、産業社会学、マスコミュニケーション、知識社会学である。西ドイツは工業社会からサービス業社会へと経済的に移行するさなかにあり、教育の領域が拡大しているところであった。他の主題は、民族学（Ethnologie）、文化と社会、都市研究、組織社会学、集団社会学、そしてライフコースと社会変動であった。

最後に挙げた主題を示す例として、フリートヘルム・ナイトハルトの集団社会学に関する論文〔Neidhardt 1979〕、ヴォルフガング・シュトレークの中間組織の変化に関する論

---

[23] 1972-1980 年に、ギュンター・アルブレヒト、フリッツ・ザック、アルフォンス・ジルバーマンが編集発行に参加したが、公式には共同編集発行人に名を連ねていない。

[24] 以前の編集者は、ペーター・ハインツ、ディートリッヒ・リューシェマイヤー、フリッツ・ザック、カール＝ディーター・オプ、ギュンター・アルブレヒト、アクセル・シュマールフースであった。2006 年からフォルカー・ドライアーが編集者を務めている。

[25] その後、『ケルン雑誌』編集発行人代表は 2013 年から 2015 年までカルステン・ハンクが務め、2016 年からハンス＝ユルゲン・アンドレスが務めている。

[26] 本号に関わる別の論争として、特にレプシウスとケーニヒの側とシェルスキーの側とに分かれて行われた社会学の歴史をめぐる論争がある。その論争は社会学が 1933 年より前にすでに終焉を迎えていたのかどうか（シェルスキー）、あるいはちょうどヴァイマル共和国の終わりごろに根本から復活し、その後「情け容赦なく完全停止に至った」のかどうかという問いをめぐって行なわれた（König [1958] 1967: 14, 1987: 343 以下 ; Lepsius 1979: 26, 1981a: 17; Schelsky 1981: 15）。

文〔Streeck 1987〕、そしてマルティン・コーリのキャリア分析に関する論文〔Kohli 1985〕が本号に再録されている。そのコーリの論文は「キャリアと年齢を独自の社会構造的次元として捉える」必要性を強調している（Kohli 1985: 1 [2017: 495]）。この論文が公刊されたのと同年に、コーリはベルリン自由大学に「加齢と経歴研究グループ（Forschungsgruppe Altern und Lebenslauf, FALL）」を設立した。その際に年齢期とライフコースへの社会学的な関心が高まったことと対応していたのが、出生率の低下、社会の高齢化や個人化の進展といった、同時代の人口学的な過程（参照、Conze 2009: 546 以下）と女性解放の過程であった。

ナイトハルトは本号に再録した論文のなかで、「集団（グループ）」を（社会心理学的なカテゴリーとしてのみならず）社会学的なカテゴリーとして発展させることを強調した。集団社会学的な研究やアプローチは、例えばケーニヒが自身の尽力したフィッシャー辞典のなかで数頁にわたって記載していたように以前から存在したが、「集団」をどのように分析的なカテゴリーとして社会学のなかで、そして社会心理学の集団概念から差別化して規定しうるのかという点については体系的な厳密化がたびたび欠けていた。ナイトハルトの考えでは、「集団」カテゴリーの社会学的な特殊性は、集団を機能的に定義するのではなく、むしろ単純なシステム〔相互行為〕と組織の間に位置づけられる、人間関係のシステムや「行為の特殊な意味連関」（Neidhardt 1979: 641 [2017: 436]）として定義するかぎりで、システム理論的なアプローチによって最もよく際立たせうるものであった。集団社会学は、ナイトハルトによるテロリズム団体とテロリズムの行為過程の社会学にとって重要なものであり、バーダー・マインホフ・グルッペ（Baader-Meinhof-Gruppe〔後に Rote Armee Fraktion（赤軍派）と改称〕）に関する彼の報告書と集団社会学的な研究（Neidhardt 1982a; Neidhardt ほか 1982b）は、連邦刑事庁（BKA）のテロリズム撲滅闘争にも直接に関わりをもった。ナイトハルトは 1983 年に『ケルン雑誌』の集団社会学に関する特別号を編集発行した。

本号に再録したシュトレークの論文は、「二次システム」（Streeck 1987: 472 [2017: 526]）の変動過程、中間組織つまりシュトレークの言う「メンバーをもつと同時にそれ自体がメンバーでもある」（Streeck 1987: 472 [2017: 526]）組織、あるいは政党、労働組合、団体、結社、そして新しい社会運動に取り組んでいる。その論文の数年前にすでに彼は、ドイツの労働組合の組織上の変化について研究していた。シュトレークの労働組合研究は労働組合の変化を背景に行われており、その変化のなかでフォーディズム段階の「ドイツ資本主義」における労働組合のコーポラティズムの機能は、世界市場を指向する「競争コーポラティズム（Wettbewerbskorporatismus）」によって置き換えられ、その結果として労使関

係の規制緩和、賃金カット、労働組合の闘争能力の弱体化が伴われた。

上述の論文は、シュトレークによるネオコーポラティズム研究をさらに深めたものであり、彼は環境条件が変化するなかでの中間組織の変化についての問いを、新たな研究視点の提示と結びつけた。例えば、中間組織によるサービス業指向の増大はどのように説明されるのか。国の規制緩和によってどの程度まで労働組合ないし他の利益団体が影響力を失っていったのか（参照、Streeck 2008: 657）。そうした組織にとって重要なのは、特に二つの水準の間を媒介すること、つまり内側への社会的統合と外側へのシステム統合の間、そして「メンバーの論理と影響力の論理」（Streeck 1987: 474 [2017: 528]）の間を媒介することであり、そこでミクロ水準とマクロ水準の間での中間組織の「中間的な位置づけ」や、両水準の間での「可能な相互作用効果」や相互作用そのものが考慮されるべきである（Streeck 1987: 491 [2017: 545]）。ミクロ－マクロ二元論の克服という問題はその後、1980年代終わりごろには社会学界でも中心的なものとなった。

11　1980年代の社会学理論界における力学

総じて1980年代は、西ドイツ社会学にとって特に社会学理論界における過程を考えると重要な年代であった。強調しておけば、「大きな」社会学理論の全盛期であったと言えるだろう。つまり、1981年にはユルゲン・ハーバーマスの『コミュニケイション的行為の理論』（Habermas 1981〔=1985-1987〕）が公刊され、1984年にはニクラス・ルーマンの『社会システム理論――一般理論概要』（Luhmann 1984〔=1993-1995〕）が公刊された。ポストモダン言説がフランスとアメリカ合衆国からドイツへともたらされ、ドイツではポストモダンとポスト構造主義の諸構想が激しく攻撃された（Kneer und Moebius 2010）。1984年にはトマス・ルックマンとアルフレート・シュッツの『生活世界の構造』第2巻が公刊された。1986年にはチェルノブイリの原子炉事故と時を同じくして、ウルリッヒ・ベックの『危険社会（リスク社会）』が公刊され、再帰的近代化の理論に基礎が与えられた。社会学理論界ではさらに、「パーソンズ主義（Parsonianismus）の刷新」（Joas und Knöbl 2004: 403以下）が生じ、ドイツ語圏では特にリヒャルト・ミュンヒによる研究に代表されている。そして他の国際的な理論もいっそう受容されるようになり、例えば特にハンス・ヨアスが社会学的な側面をさらに発展させたアメリカのプラグマティズムや、ピエール・ブルデューやアンソニー・ギデンズの実践理論、そして新制度派のアプローチや合理的選択理論が挙げられる。ハーバーマスとルーマンは1980年代初めに行為／アクターと構造／システムとの間の二元論を依然としてはっきりと示していたが、1980年代終わりごろに

はエリアス、ブルデュー、ギデンズによって、そうした二元論の克服を目指すアプローチが取り上げられ議論された。二元論の克服と、ミクロ視点とマクロ視点を密接につなぐことは、ジェフリー・アレクサンダー（Alexander 1988）の評価によって国際的に、1980 年代の若い世代にとって同時代の理論発展と理論努力を特徴づける目印そのものとなった。そうした「綜合的な理論化」（Alexander 1988: 77）を示す例として、本号に再録したウーヴェ・シマンクの論文〔Schimank 1988〕がある。その論文で提示されたアクターを基礎とする分化理論は、「社会での行為のアクター理論的な説明を、社会の部分システムについてのシステム理論的な構想を組み込むことによって改良する」ことを目指していた（Schimank 1988: 620 [2017: 550]）。

12　1990 年以後の社会と社会学

ベルリンの壁の崩壊とともに、1980 年代に観察されていた例えば失業率の増加といったドイツ連邦共和国の政治的問題は、短期間のうちに背後へと退いていった。すでにはっきりと見て取れるようになっていた「国民諸社会のヨーロッパ化」（Bach 2000 を見よ）や一般的なグローバル化の過程がさらに加速し（Schild und Siegfried 2009: 444-445）、その加速が同時に地域主義、ナショナリズム、そしてアイデンティタリアニズムといった諸勢力の反動を引き起こした。ベルリンの壁の崩壊と東西ドイツ再統合が 1945 年のようにある種の「ゼロ時（Stunde Null）」を示すことはなかったとしても（参照、Rehberg 2000: 20）、この二つの出来事は巨大な変革を意味していた。社会科学が予見しなかった社会の変化によって衝撃を受けたことで、社会科学のなかで新たな過程と刺激が目につくようになった。そのため比較的早くから社会学的な体制転換研究（Transformationsforschung）が行なわれ始め（参照、Hauser 2010）、特に「新連邦州における社会変動・政治変動研究のための委員会（Kommission für die Erforschung des sozialen und politischen Wandels in den neuen Bundesländern, KSPW）」の設立――この委員会の課題は、東ドイツの学術システムの再組織化と関わっていた――と、ドイツ研究振興会（Deutschen Forschungsgemeinschaft）による「旧東ドイツ社会の統合過程における社会変動と政治変動」というタイトルでの重点プログラムの設置とによって促進された。このプログラムは 1990 年 6 月にすでにクラウス・アラーベック、ハルトムート・エサー、カール・ウルリッヒ・マイヤー、ヴェルナー・タックそしてエルヴィン・K・ショイヒによって始められ、1991 年初めにドイツ研究振興会によって承認された（Esser 2000: 7-8）。

社会学的な体制転換研究には、さまざまな観点が見出される（参照、Joas und Kohli

1993; Schäfers 1996; Conze 2009: 749; Krause und Ostner 2010）。体制転換研究へのアプローチの広がりは、近代化理論（例えば、ヴォルフガング・ツァプフ［Zapf 1991a, 1991b］に代表される）、システム理論（例えばデトレフ・ポラック［Pollack 1990a, 1990b］に代表される）、制度社会学そして心性社会学（ヴォルフガング・シュルフター［Schluchter 1996］）、法社会学（ベルンハルト・シェーファース［Schäfers 1996］）、ジェンダー社会学（例えばヒルデガルト・ニッケル［Nickel 1995］の研究）、そして社会運動の社会学（Wielgohs und Schulz 1993）のアプローチから、個人主義的ないしアクター理論的な合理選択アプローチ（例えば本号に論文を再録したカール・ディーター・オプによって代表される）にまで及んでいる。

1990年代に特徴的なのは、社会の変動過程の水準で生じた新しい社会的な問題状況であり、その問題状況に対応して社会学界では個別社会学の意義が増大していった（同時に、ハーバーマスやルーマンの社会学的なグランド・セオリーの受容が減少していった）。

ヘルムート・コールが選挙戦のなかで誓い、そして新たな経済の奇跡への期待を駆り立てた「花ざかりの景観（blühende Landschaften）」は、ついにやって来なかった。1990年以前からすでに支配的であった、経済のグローバル化にも原因がある構造的な失業の問題（参照、Görtemaker 2009: 101以下）は、東西ドイツ再統合によって拡大した。社会の分裂過程や脱統合過程が進んでいった（参照、Honneth 1994; Heitmeyer 1997; Lessenich und Nullmeier 2006）。

「分化した多元的なポスト階級社会を1980年代に構想していた社会学者は、いまや非マルクス主義の側からも《イデオロギー含みの視野狭窄》と認められている。《貧困》や特に《子どもの貧困》の概念も、公の注目を強く引くようになっている――以上の概念は、1980年代からすでに社会科学のなかで議論されてきたものであった」（Schildt und Siegfried 2009: 481-482; また Honneth 1994: 100以下も参照のこと）。

『ケルン雑誌』特別号32巻は、そうした状況への徴候と反応と考えられ、1992年に「近代福祉国家における貧困」に取り組んでいる（Leibfried und Voges 1992）。「豊かさにもかかわらず貧困があること」（Bohle 1997）は、そのパラドックス的な形態によって詳細な社会学的分析を呼び込む所見となった。それにしたがって、1990年代からプレカリティ（Prekarität）、社会的排除、「排斥感情」に関する社会学的研究が増加した（参照、Schildt und Siegfried 2009: 482; Bude und Willisch 2007）。

多くの東ドイツの人びとの間では、「統合の高揚感」の後ほどなくして、他律性、故郷喪失、幻滅、「文化的な低評価」（Conze 2009: 748）、「漠然とした不安」といった感情が広く占めるようになった。例えばドイツ連邦議会の議長を務めたヴォルフガング・ティール

ゼが、以下のごとく見なしていたようにである。

> 国家的に統合されたドイツは、今日では不安に苛まれ、不平等と非同時性によって特徴づけられた国になってしまった！・・・そうした押し寄せる不安は、ドイツの失業、犯罪、「過剰な外国人の比率」、戦争に巻き込まれることといったものへの不安に入れ替わり立ち替わりするなかで高まっていく。そうした不安は、攻撃のはけ口として繰り返し新たな、そして繰り返し同じ対象を探し求める。つまり、亡命申請者、外国人、よそ者、障害者、左翼、マイノリティ一般（そして――不機嫌が向けられる不特定の対象としての――「政治家」も）である。（Thierse 1994: 53-54）

極右による暴力行為の数と、その行為へ賛同を示す度合いは、1991 年以降圧倒的に増加している（参照、Conze 2009: 784 以下）。しかし、ティールゼの記したような「攻撃のはけ口（Aggressionsabführungen）」や脱統合の不安は、たとえそうした攻撃や不安が脱統合過程、民主主義批判、不利な扱い（を受けているという感情）、そして社会的・経済的な不利益によって「より強く特徴づけられ」ていたとしても（Babka von Gostomski ほか 2007: 121; Mansel und Kaletta 2009）、東ドイツの大転換の結果であった（である）だけではなく、また東ドイツだけに限られたものでもなかった（し、今もそうではない）。そうした攻撃や不安は、「ハルツ 4（Hartz IV〔失業手当関連法〕）」（2005 年初めより）の導入によって増幅された社会的下降の不安、新自由主義的なグローバル化の傾向、それに関連する再国民化政策やアイデンティティ・ポリティクスについての構造的に条件づけられた表現でもあったということを（例えば、ドイツにおける「主導文化（Leitkultur）」をめぐる論争［参照、Schild und Siegfried 2009: 513］や「ドイツ・マルク・ナショナリズム」［ハーバーマスの表現］をめぐる論争、さらにオーストリアのイェルク・ハイダーの右派ポピュリズムやイタリアのベルルスコーニ［参照、Conze 2009: 825］も想起されるだろう）、「集団に結びついた人間嫌悪」に関する経験的研究によって示したのがヴィルヘルム・ハイトマイヤーらの研究グループであった[27]。

さらに加えて社会的に重要な主題となったのが、環境保護である。1996 年にアンドレアス・ディークマンとカルロ・J・イェーガーは環境社会学を主題とする『ケルン雑誌』特別号を公刊した。環境行動について見ていくと、エコロジー行為の要求と現実との間の著

---

[27] これらの過程はすべて、当然ながらグローバルな危機の文脈でも理解することができる。イラク戦争やユーゴスラヴィア内戦、ソ連の解体が思い起こされる（参照、Herbert 2014: 1144）。

しい裂け目は、政治的な行動水準のみならず、本号に再録したアンドレアス・ディークマンとペーター・プライゼンデルファーの論文〔Diekmann und Preisendörfer 1992〕が示したように個人的な行動水準でも形成されている。環境意識と個人的行動の間の矛盾は、アクターたちのもとでは矛盾を止揚するための一定の合理的な、彼らのアンビヴァレントな行動を正当化する言説戦略によってたびたび認知的に克服されているが、著者たちの合理性理論の仮定によればそうした矛盾は「環境意識と個人的刺激の結びつき」によってある程度解消されている。

もう一つ社会的に重要な主題となったのが、教育政策と教育システムである。教育システムは特に、2000年代半ばから政治的・社会的な注目を強く集めるようになった。科学と教育はいまやますます直接的な利用可能性の観点から見られるようになった。そのことに特に寄与したのが、ピサ・テスト（Programme for International Student Assessment, PISA〔国際学習到達度調査〕である。ピサ・テストはドイツのなかで、さらに他国と比べても、教育に欠陥があり、全住民グループを教育拡大に関わらせる上で機会の不平等があることを明らかにした（参照、Wolfrum 2013: 511）。とりわけ立証されたのが、1970年代以来すでに教育社会学ではピエール・ブルデューとジャン＝クロード・パスロン（Bourdieu und Passeron 1971）の研究によって決定的なものとされていた、社会的出自、文化資本そして学校成績の間の相関関係であった。本号に再録したリヒャルト･D･アルバ、ヨハン・ハントル、ヴァルター・ミュラーの1994年の論文が示すように、ブルデューとパスロンの研究成果はドイツでもピサ・テストより何年も前から立証されていた。学校システムのなかでさまざまな移民グループが不利に扱われていることを分析して明らかになったように、「ドイツの教育システムのなかでのエスニシティ間の不平等」は経済的資本の利用可能性の違いのみならず、むしろ「両親の家で話される言語や子供の学歴といった文化的要因」に基づいている（Alba ほか 1994: 235 [2017: 642]）。そうした不平等が長く維持されており、今日に至るまでピサ・テストによって明らかにされているということは、社会構造上の違いや不平等が変更可能なものとなったり解体されたりしたのではなく、さらに引き続いて再生産されているということを結果として意味している（参照、Lessenich und Nullmeier 2006）。そうした研究成果はブルデューに依拠した研究（Schultheis und Schulz 2005）だけが提示しているのではなく、例えば本号に再録したハンス＝ペーター・ブロスフェルトとアンドレアス・ティムによる「教育システムによる結婚市場への影響」に関する研究〔Blossfeld und Timm 1997〕もそこに加えることができる。「学歴同類婚の割合がコーホートを超えて高まっていることは、・・・社会構造と社会圏の閉鎖性が強まっていることを表している。・・・つまり、概して諸個人が気づかないうち

に社会的不平等が世代内および世代間で再生産されており、個人的選好に大いに支えられている経験的研究の社会学的な価値が疑問に付されている」（Blossfeld und Timm 1997: 471 [2017: 677]）。

失業、プレカリティ、貧困、外国人嫌悪（ゼノフォビア）、排除、環境保護、移民、教育の他にも、1990 年代から社会でも社会学でも重要なものとなった諸過程や社会的な問題状況が残っているとは言うべきであろう。ただしここでは、キーワードを挙げるにとどめざるをえず、またすべてを挙げることもできない。2001 年 9 月 11 日のテロ攻撃によって、宗教社会学と文化社会学の流行が生じた。また、とりわけ 2008 年の金融危機によって、経済社会学的な分析や資本主義理論的な分析が興隆した（『ケルン雑誌』特別号 45 巻［Windolf 編 2005］と 49 巻［Beckert und Deutschmann 編 2009］も見よ）。その間に、空間社会学や都市社会学の研究が好況を呈し、さらにジェンダーによる不利な扱いやセクシズムが依然として続いていることによって、ジェンダー社会学研究が中心的な役割を担うようになった。それ以外にも個人化と新しい共同体形成の過程についての研究や、個人に対する社会に媒介された自己最適化要求の高まりについての研究（統治性〔gouvernementalité〕研究）が行なわれている。今日の社会学的な時代診断では、不安社会（Angstgesellschaft［Bude 2014］）や下降社会（Abstiegsgesellschaft［Nachtwey 2016］）と言われている。

13　社会学と知識人的批判

以上の過程や問題状況はすべて、社会学的な分析と批判を必要とするものである。その点で参考になるのが、本号に再録した M・ライナー・レプシウス（Lepsius 1964: 75 以下 [2017: 229 以下]）の「知識人の社会学」に関する論文である。というのも、先に挙げた諸過程や問題状況は、社会学者たちの知識人としての役割、つまり自分たち自身が分析する社会の諸関係の内部での（そして自由に浮動するのではない）知識人としての役割についての問いを投げかけるものだからである。社会学者たちは知識人の役割を引き受けてもよいのであろうか。つまり、社会学者たちが社会の専門的な観察者や分析者として社会的な問題状況を観察、測定、そして記述するのみならず、批判も行ない、（社会の）批判を自らの職業や使命としてもよいのであろうか。

レプシウスの上述のテクストは、1963 年 6 月 10 日の教授資格講演を拡張したものである。その講演は 1962 年シュピーゲル誌事件（Spiegel-Affäre 1962）と、その後に続いた抗議活動の影響を受けている（参照、Bering 2010: 354 以下）。レプシウス（Lepsius 1964: 89-

90 [2017: 242]）によれば、シュピーゲル誌事件の意義は、短期間のうちに連携し、一定の価値基準（この場合、報道の自由と表現の自由）に関する合意に寄与し、そして解釈の独占を図ろうという政府の試みを挫折させた、そうしたさまざまな批判形式の連立にあったという。

レプシウス（Lepsius 1964: 79 以下 [2017: 234]）がマンハイムとガイガーによる知識人の社会学に対して批判的に記しているように、知識人は自由に浮動する精神的なつながりによって束ねられたり、あるいは個人的に自分の良心にのみしたがって行為する「一握りの個人」だけによって形成されるのでもない。レプシウスによれば知識人は、むしろ一連の「知識職（Intelligenzberuf）」から構成される。そして誰かが知識人となるのは、個人的な態度だけによるのではない。そうだとしたら、知識人の社会学よりもむしろ知識人の心理学が必要となるだろう（Lepsius 1964: 81 [2017: 235]）。そうではなく、一定の社会的状況から知識人となるのである[28]。ジョセフ・A・シュンペーターに依拠するレプシウスにとって、「インテリ（Intelligenzler）」は「批判を行なう時にはつねに、また批判を行なうかぎりで知識人（Intelektuelle）となる」（Lepsius 1964: 82 [2017: 235]）[29]。レプシウスはシュピーゲル誌事件のうちに揃っていたとする批判の三形式を区別した。つまり、(1) 専門的批判、例えば専門判断（「専門職に属する人による専門職の枠内での批判」[Lepsius 1964: 83 [2017: 237]]）、(2) 準専門的批判（例えば熟知したジャーナリストによる）、そして (3) 非専門的（知識人的）批判である。非専門的批判は、正当なものでも非正当なものでもありうる。非専門的批判が正当なのものとなるのは、「社会的行動の模範としての妥当性についてコンセンサスがある価値に関わる」かぎりにおいてである。「反対に、非専門的批判が非正当なものとなるのは、コンセンサスがなく妥当性について争われているような価値や価値の組み合わせが判断の基礎となっている場合である」（Lepsius 1964: 87

---

[28] ヴォルフガング・エスバッハ（Eßbach 1988: 17）は社会的状況や知識人による相互行為の定義とそこから始まる状況の定義や社会的なものの解釈過程を考慮に入れることで、一定の仕方で知識人という社会現象に対するプラグマティックな観点を参照するそうした視点を、青年ヘーゲル派研究のなかで以下のように明確に述べている。つまり、知識人は「イデオロギー批判や知識社会学が根本的に想起させるように社会の利害関心を単純に模写するのではなく、一つの社会的状況を形成している。その社会的状況のなかでは社会の諸矛盾や多様化する社会的な利害関心が別様に現われており、また現われるに違いない。というのも、知識人たちが集まることそれ自体が一つの社会的事実だからである」。

[29] 知識人研究のなかでは、長年に渡る論争を経て以下のような定義が形成されてきた（参照、Peter 2001: 240; 以下の定義は Moebius 2010a: 42 から筆者が引いてきたものである）。つまり、知識人と呼ばれるのは、学術、芸術、宗教、文学、あるいはジャーナリズムの領域で活動し、そこで専門能力を獲得して質的に保証され、そして公的な議論や言説に批判的ないし肯定的に介入し一定の位置についている人びとのことである。この定義によれば、知識人は必ずしも特定の政治的、イデオロギー的、ないしは道徳的な立場に拘束されているわけではない。したがって知識人は、異なる政治的諸陣営や諸潮流のなかに、そして制度的拘束の内外に存在しうる。

[2017: 240]）。

非専門的な知識人的批判の影響力の強さは、レプシウスによれば正当性の度合いに左右される。そして批判がはっきり非正当なものと見なされるならば、知識人は被迫害者にも革命家にもなるという。したがって正当性が判断されるのは、社会における特定の価値についての合意によってであり、そして「基本価値がおよそ一般的に解釈されうる」（Lepsius 1964: 87 [2017: 240]）程度に応じてであるという。他方でこのことは「公共性」（参照、Habermas 1962〔=1973〕）のあり方を指し示すものであり、レプシウスの考えをハーバーマス（Habermas 2006）の考えによってさらに進めるならば、公共性の構造転換とともに社会的な知識人像もまた確かに変化するものであると言えよう。

知識人の社会参加（アンガージュマン）は1960年代や1970年代の公共圏において、もっぱら知識人たちの介入と「攪乱要因」（シュンペーター）としての知識人たちの役割が、彼らのジャーナリストとしての、芸術家としての、あるいは学者としての専門能力の評価と評判に基づいていたという理由から一定の共鳴を呼び起こした。例えばジャン＝ポール・サルトルやテオドール・W・アドルノのような古典的な知識人は、社会の代理要求や支配についてのラディカルな批判で共通していた。彼らとはまったく異なるのが、数年来舞台に上がりメディアの脚光を浴びている新しいタイプの知識人、つまりメディア知識人である。古典的な知識人の本質をなす特徴は、メディア知識人にはもはや当てはまらない。メディア知識人であることを示す基準は第一に、自身の登壇とメディアの存在感とによって得られた著名性である（参照、Moebius 2010b）。

社会学者たちは知識人として現われる場合、社会での公共性の構造転換やそれと結びついた社会的な知識人像の変化、つまり単に注目を集めることを求めるメディア知識人という知識人像への変化といった現代的な危険性をも免れられないのだろうか（参照、Habermas 2006; Moebius 2010a, 2010b）。あるいは社会学者たちは知識人として、そうした誘惑に逆らって自分たち自身の立場を社会学的に反省し（参照、Bourdieu 2002〔=2011〕）、そしてレプシウス（Lepsius 1964: 90 [2017: 242]）にしたがって「批判の本質的機能」を果たすこと、つまり「つねに新たに、特定の価値基準の妥当性に関する社会での実質的なコンセンサスをもたらし、かつ解釈可能性を開いておくこと」に成功するだろうか。

特に『ケルン雑誌』初期の編集発行人であるルネ・ケーニヒ（König 1965: 26）がかつて「対抗科学そして社会批判としての社会学」のなかで求めていたように、社会学者たちが、もっと言えば社会学がそもそも「批判や対抗の手段」であるべきかどうかは、確かに一つの争点である。この争点は社会学そのものとほとんど同じくらい古くからあり、遅くとも価値判断論争（参照、Albert 2010）以来、社会学的な言説の長期的な主題となった。そし

てこの主題は「象徴的暴力」（Moebius und Wetterer 2011）や「公共社会学（パブリック・ソシオロジー）」をめぐる今日の議論にまで続いている（参照、Burawoy ほか 2015）。

しかし、社会学者たちがメディアの関心経済（アテンション・エコノミー）の枠内でますます聞く耳をもたれなくなり、政治学者たちや経済学者たちとは違ってせいぜい専門家として言説の輪に（ただし、なお言説の輪が問題となるのであって、「コンフロンテイメント（Confrontainment〔対決型エンターテイメント〕）」が問題となるのではない場合に）招かれるにすぎないがゆえに、社会学者たちが知識人的に活動すべきか否かという論争がいよいよ時代遅れと思われるならば、いったい何が時代遅れと思われるようになったのであろうか。社会学者たちに欠けているのは、メディア界で完璧に鍵盤を叩くことのできるメディア知識人なのだろうか。社会学者たちはそもそも知識人的な批判者として、さまざまな主題について自分たちの研究対象である社会に関わる立場を鮮明にしたいのであろうか。それとも社会学者たちは、この「ゲーム」へ参加するためには必要であると思われる知識人がパフォーマンス・アーティストへと転じることを引き受けることを、まったく拒否するのであろうか。なぜかと言えば、このゲームは科学的な基本法則や分野内の基準への習熟ではなく、適切な自己演出やメディア資本の蓄積に加えて、特に単純化、イデオロギー的な即断、あるいは十分に練られていない抗議を必要とするからである。このことは例えば、ペーター・スローターダイク（Sloterdijk 2009）による、社会的不平等は豊かな者の自発的な施しによって解消されるべきとする「手助けの革命」（Revolution der gebenden Hand）の訴えを想起させる。というのも、社会学的な知識人たちの側での拒絶の態度は、一方では論理的なものと思われるが、他方では反対にそうした状況が社会の変革や批判的で公的な理性の復活に対して攻撃を加える姿勢へとつながりうるからである（参照、Bourdieu 1998: 17〔=2000: 19〕）。

劇的表現、演劇化、美学化、ストーリー・テリング、体験志向、個人化（パーソナライズ）できること、そして娯楽を強く求めるメディア界の論理と基準（参照、Bourdieu 1998〔=2000〕; Dörner 2001; Meyer 2001「メディアクラシー（Mediokratie）」）、公共圏への参加条件やその場所と形態をラディカルに転換させた公共性のポストモダン的な構造転換（参照、Münker 2009）、その構造転換と並行する知識人一般として聞く耳をもってもらいたいという要求の変化、以上に挙げたことはすべて、公的な議論のなかに社会学者たちが不在であることによって説明しうる要素である。

移民過程、右派ポピュリズム、あるいは経済危機といった今日の主題についての公的な論争のなかで、社会学者たちには是非にも語るべき何かがあるであろう。実際に社会学の専門家が以上の主題について研究をしていないことはない。それにもかかわらず一見する

と、社会学者たちはもっぱら「非専門の知識人的な批判者」（レプシウス）としてのみ認識され、現代の問題状況についてはむしろ政治学や経済学の代表者に向けて尋ねられているように思われる。その点に関するさらなる説明として、以下のようなものがありうる。つまり、社会学者たちは確かに社会についての総合的な問い、システム複雑性、そして社会問題といった領域の専門家と見なされている。社会学者たちによる時代診断もまた、幅広く公衆たちによく読まれており、しかも例えば劇的表現やストーリー・テリングといったメディア論理の中心的な要素を含んでいる（参照、Volkmann 2015: 148-149）。そうした時代診断のなかにも、社会への総合的な視点を見て取ることができる。というのも、それらの診断はたいていの場合、社会の個別的な部分領域という一断片を越えて、分析的に「全体としての社会」（参照、Schimank 2000: 14）へと広がっているからである。一方で、社会学者たちは依然として、加速化、共鳴、不安、体験志向などの一般的な社会過程の専門家として評価され、読まれ、文芸欄のなかで議論されているが、他方で、社会の分出や部分システムの複雑性についての意識や認識はすでに流布し深められており、公共圏はさまざまな問題をもはや社会全体に伝わっているものと理解することはできない。特殊な問題設定を解釈する上で、全体の解釈が引き合いに出されるよりも、むしろ部分システムの細部の問題を扱う専門家が引き合いに出されることがはるかに多くなっている。そうすると、社会学者たちはたいてい専門分野の代表者としてのみ現われ、もはや知識人として現われることなく、もはやミシェル・フーコー（Foucault 1978: 46 以下〔=2006: 360 以下〕）の言う「特殊領域の知識人（intellectuel spécifique）」としても現われることはない。フーコーの理解によれば、「特殊領域の知識人」は自身の専門領域の専門家でもあるが、専門家としての役割のもとで社会の論争や不都合な状況に介入し、その諸条件を明らかにして普遍的な価値を代弁する。そうすることで、特殊領域の知識人は単なる専門家であることを止める。したがって、今日メディアや他の公共圏の場所で専門家に所見が尋ねられる場合には、一般的に社会理論的な視点も、また知識人的批判も、レプシウスの言う「専門的批判」を手にした専門家のために放棄されるというのが私のテーゼである。レプシウスは「専門的批判」を手にしている専門家について、表面上は価値自由に、関連する界（政治、経済）の記述だけにとどまるとともに、普遍的な価値や複雑な社会の文脈について批判的に論じることは避ける、そうした専門に特化したアクターと理解していた。それゆえ社会学的な時代診断の場合のように、ここでも本稿の初めに立てた社会学史的に重要な問いが提起されるだろう。つまり、社会学者という社会の専門的観察者のみならず、他の諸分野の専門家たちもまた、どのような解釈の型、認識の型、分類の型によって導かれているのだろうか。したがって社会学史的に研ぎ澄まされた批判は、以下のように反省する。学術

共同体（science community）のなかでは社会の諸過程と諸問題の理解について何が影響を与え、何が促進し、そして何が妨げているのであろうか。専門家たちはどのような「社会」を構築し、そしてどのような「社会」を替えがきかないものとして奉っているのであろうか。

結局のところ、ディシプリン意識のなかに深く根づいた価値判断論争はおそらく、社会学者たちが公共圏に介入し、自分たちの専門的所見を提供し、そして自分たちの分野に基づく知識人的批判を行なうことに対して、ときに理由のある、またときに理由のないためらいをもつことにつながった。知識人的批判を行なうことは、けっして科学的基準を放棄することを意味しない。その反対である。というのも、問題は「価値志向と客観性の避けがたく架橋できない矛盾」のうちにあるのでは「まったくない」からである。「社会学者たちは遠い惑星のように研究対象に向かい合っているのではなく、自分たち自身がそもそも研究する対象の一部である。社会学者たちは矛盾する社会のさまざまな利害関心と行為目標のなかに包み込まれている。こうした事実を彼らは、自発的に分離させたり覆い隠したりするのではなく、批判的に反省しなければならない。利害関心がなく価値自由な研究というものは存在しないがゆえに、科学的な価値自由とは一つのフィクションである。重要なのはむしろ、研究を行なう社会学者が第一に自身の規範的な志向を機会に応じて覆い隠すのではなくつまびらかにし、第二に科学的な専門性の基準に注意を払い、第三に一方での自身の規範的な出発点と他方での自身の研究成果とがたがいに矛盾しうるということを認識することである。言い換えると、社会学の党派性は、研究された対象の諸成果を自分たちの党派性に有利なように操作したり、あるいはその成果の未解決の部分を排除したりする場合にのみ、非科学的なものであることが明らかになる」（Peter 2016: 306）。

とはいえ、社会学的な批判は高度に自己反省を含まなければならないということに強く注意を促したのが、とりわけピエール・ブルデュー（Bourdieu 1991: 18 以下；また Burawoy 2015: 33 以下も参照のこと）である。このことは、マンハイムによるあらゆる思想の立場被拘束性の指摘を想起させ、また近年でもアルミン・ナセヒが批判の効力を促す契機として知識人たちのネットワーク化と翻訳コンフリクトとを構想する枠組みのなかで強調した。つまり、批判はつねに「背後に回ることのできない、自身のパースペクティヴのパースペクティヴ性」を考慮に入れなければならないという（Nassehi 2015: 283）。公的で知識人的な批判はそうした自己反省によって必ずしも活力を奪われるのではなく、反対に自分たちが知識人的な介入を行なう可能性に賭けることや、さらに学術的な生産と配分の自律性をめぐって闘うことをもより良いものとしうる。

社会学的な社会批判が現在はメディアで周辺に追いやられているにもかかわらず、社会学のなかではここ数年来いわゆる公共論的転回（public turn）の傾向が見出される。この

傾向には、マイケル・ブラウォイの公共社会学（public sociology）の構想が決定的に寄与している（参照、Aulenbacher und Dörre 2015: 12）。社会学がブラウォイの構想から出発して現実に公共圏への「虎の跳躍」を行なうのは、なるべく多くそしてメディアに影響があるかたちで公共圏に登場することが重視される場合ではなく、内容的にも語るべき何かをもっている場合のみである（参照、Aulenbacher und Dörre 2015: 12）。そしてその何かとは、われわれの時代の社会の諸問題と諸過程について直接応答し、解決方法を提示するものである（例えば、レプシウスが論じたシュピーゲル誌事件に際した知識人的批判のうちに見て取れるように）。ブラウォイ（Burawoy 2015: 41）自身はこうした公的な有効性と批判を、社会学が市民社会のために引き受ける役割に結びつけている。経済学者たちや政治学者たちは、自分たち自身の視点から既存の政治的秩序ないし市場経済を、メディアの公共圏にとって自分たちが危険でないと思われるような言葉で擁護する傾向にある。その反対に、ブラウォイが主張する公共社会学は、単に社会についての公的な、そして言説的な理性的判断を下すものではなく、むしろ市民社会の立場から断固として資本主義批判的でグローバルな視点を代表するものであるという。「したがって、公共社会学の意義は、国家と市場の連携による攻撃に同じように直面しているさまざまな組織、制度、共同体、運動どうしの結びつきを強化することにある。……しかしわれわれの社会参加は、節度をもった慎重なものでなければならず、本来の専門的な社会学にとって必要な自律性を犠牲にするものであってはならない。そしてそのためにわれわれは活発な批判社会学を必要としている」（Burawoy 2015: 41）。ブラウォイの意見表明が社会学的な学術共同体の内部でどれだけ賛同を得られるのか、また公共社会学が公的にも聞く耳をもたれうるのかどうかは、今日の社会の諸過程や学術と公共圏の構造転換を受けて依然として未決の問いのままである。その問いへの答えがいかなるものとなりうるかは、とりわけ社会学者たち自身にかかっている。

付録　本特別号〔『ケルン社会学・社会心理学雑誌』69 巻 1 号別冊（＝特別号 56 巻）〕に収録された論文

①レオポルト・フォン・ヴィーゼ（Wiese 1921）「序――ドイツの社会学雑誌の今日の課題」
②カール・マンハイム（Mannheim 1928〔＝ 1976〕）「世代の問題」
③テオドール・ガイガー（Geiger 1934）「自然選択、社会階層、世代の問題」
④ヘルムート・シェルスキー（Schelsky 1951）「難民家族」
⑤ラルフ・ダーレンドルフ（Dahrendorf 1958〔＝ 1973〕）「ホモ・ソシオロジクス――社会的役割のカテゴリーについての歴史、意義、批判の試み」
⑥カール・R・ポパー（Popper 1962〔＝ 1992〕）「社会科学の論理」
⑦ M・ライナー・レプシウス（Lepsius 1964）「職業としての批判――知識人の社会学に向けて」
⑧エルヴィン・K・ショイヒ（Scheuch 1965）「社会変動と社会調査――社会と経験的社会調査の関係について」
⑨テオドール・W・アドルノ（Adorno 1965）「社会科学の客観性に関する覚え書き」
⑩ゲアハルト・クライニング／ハリエット・ムーア（Kleining und Moore 1968）「社会的自己分類（SSE）――社会階層尺度の装置」
⑪ウルリッヒ・ベック／エリーザベト・ゲルンスハイム（Beck und Gernsheim 1971）「先進工業社会における学生騒動の理論に向けて」
⑫フリードリヒ・H・テンブルック（Tenbruck 1975〔＝ 1997〕）「マックス・ヴェーバーの業績」
⑬ニクラス・ルーマン（Luhmann 1978）「行為理論とシステム理論」
⑭フリートヘルム・ナイトハルト（Neidhardt 1979）「社会集団の内部システム――集団社会学に向けたアプローチ」
⑮ハルトムート・エサー（Esser 1984）「フィギュレーション社会学と方法論的個人主義――ノルベルト・エリアスのアプローチの方法論について」
⑯マルティン・コーリ（Kohli 1985）「経歴の制度化――歴史的所見と理論的論拠」
⑰ヴォルフガング・シュトレーク（Streeck 1987）「多様性と相互依存――変化する環境のなかでの中間組織の役割に関する考察」
⑱ウーヴェ・シマンク（Schimank 1988）「アクターの擬制としての社会の部分システム」
⑲カール＝ディーター・オプ（Opp 1991）「東ドイツ '89――自発的革命の原因について」
⑳アンドレアス・ディークマン／ペーター・プライゼンデルファー（Diekmann und

Preisendörfer 1992）「個人の環境行動――要求と現実の不一致」

㉑リヒャルト・D・アルバ／ヨハン・ハンドル／ヴァルター・ミュラー（Alba et al. 1994）「ドイツの教育システムにおけるエスニシティ間の不平等」

㉒ハンス＝ペーター・ブロスフェルト／アンドレアス・ティム（Blossfeld und Timm 1997）「教育システムによる結婚市場への影響――ライフコース上の初婚配偶者選択の経年分析」

㉓フォルカー・ドライアー（Dreier 2016）「『ケルン社会学・社会心理学雑誌』――ある社会学専門誌の発生、構造、発展について」〕

㉔ハイコー・ラウフート／ファビアン・ヴィンター（Rauhut und Winter 2017〔本号初出〕）「国、ディシプリン、言語を越えた議論のなかでの『ケルン社会学・社会心理学雑誌』のネットワークと位置づけ」

㉕シュテファン・メビウス〔本稿〕「『ケルン社会学・社会心理学雑誌』にみる社会学の歴史

参考文献

Abels, Heinz. 2010. Die Geschichte einer aufregenden Jugendsünde und die lange Wirkung einer Fußnote. Nachwort. In *Homo sociologicus. Ein Versuch zur Geschichte, Bedeutung und Kritik der Kategorie der sozialen Rolle*, Hrsg. Ralf Dahrendorf, 115–162.Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Adorno, Theodor W. 1965. Notiz über sozialwissenschaftliche Objektivität. In *KZfSS* 17（3）: 416-421.（Neu gedruckt 2017 in *KZfSS*, 69（1 Supplement）: 285-289.

Alba, Richard D., Johann Handl und Walter Müller. 1994. Ethnische Ungleichheit im deutschen Bildungssystem. In *KZfSS* 46（1）: 209-237.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS* 69（1 Supplement）: 619-644.〕

Albert, Gert. 2010. Der Werturteilsstreit. In *Soziologische Kontroversen. Eine andere Geschichte der Wissenschaft vom Sozialen*, Hrsg. Georg Kneer und Stephan Moebius, 14-45. Berlin: Suhrkamp.

Alexander, Jeffrey C. 1988. The New Theoretical Movement. In *Handbook of Sociology*, Hrsg. Neil J. Smelser, 77-101. Newbury Park: Sage.

Aulenbacher, Brigitte, und Klaus Dörre. 2015. Michael Burawoys Soziologie – eine kapitalismus- und wissenschaftskritische Herausforderung. In *Public Sociology. Öffentliche Soziologie gegen Marktfundamentalismus und globale Ungleichheit*, Hrsg. Brigitte Aulenbacher, Klaus Dörre und Michael Burawoy. 9-22. Weinheim: Juventa.

Babka von Gostomski, Christian, Beate Küpper und Wilhelm Heitmeyer. 2007. Fremdenfeindlichkeit in den Bundesländern. Die schwierige Lage in Ostdeutschland. In *Deutsche Zustände*. Folge 5, Hrsg. Wilhelm Heitmeyer, 102-128. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Bach, Maurizio.（Hrsg.）2000. *Die Europäisierung nationaler Gesellschaften*. *KZfSS*, Sonderheft 40. Wiesbaden: Westdeutscher Verlag.

Beck, Ulrich und Elisabeth Gernsheim. 1971. Zu einer Theorie der Studentenunruhen in fortgeschrittenen Industriegesellschaften. In *KZfSS* 23（3）: 439-477.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS*, 69（1 Supplement）: 335-373.〕

Beckert, Jens, und Christoph Deutschmann. Hrsg. 2009. *Wirtschaftssoziologie*. *KZfSS*, Sonderheft 49.

Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Bering, Dietz. 2010. *Die Epoche der Intellektuellen. 1898-2001. Geburt. Begriff. Grabmal*. Berlin: Berlin University Press.

Blossfeld, Hans-Peter, Andreas Timm. 1997. Der Einfluß des Bildungssystems auf den Heiratsmarkt. Eine Längsschnittanalyse der Wahl des ersten Ehepartners im Lebenslauf. In *KZfSS* 49（3）: 440-476.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS* 69（1 Supplement）: 645-681.〕

Bohle, Hans Hartwig. 1997. Armut trotz Wohlstand. In *Was treibt die Gesellschaft auseinander? Bundesrepublik Deutschland: Auf dem Weg von der Konsens- zur Konfliktgesellschaft*, Bd. 1, Hrsg. Wilhelm Heitmeyer, 118-155. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Bourdieu, Pierre. 1991. *Die Intellektuellen und die Macht*. Hrsg. Irene Dölling. Hamburg : VSA.

————. 1998. *Über das Fernsehen*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.〔Erst publiziert im Französischen 1996 als *Sur la télévision: suivi de l'emprise du journalisme*. Paris: Liber；2000, 櫻本陽一訳『メディア批判』藤原書店 .〕

————. 2002. *Ein soziologischer Selbstversuch*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.〔Erweitert publiziert im Französischen 2004 als *Esquisse pour une auto-analyse*. Paris: Raisons d'Agir.；2011, 加藤晴久訳『自己分析』藤原書店 .〕

Bourdieu, Pierre, und Jean-Claude Passeron. 1971. *Die Illusion der Chancengleichheit: Untersuchungen zur Soziologie des Bildungswesens am Beispiel Frankreichs. Texte und Dokumente zur Bildungsforschung*. 1. Aufl. Stuttgart: Klett.

Bude, Heinz. 2014. *Gesellschaft der Angst*. Hamburg: Hamburger Edition.

Bude, Heinz, und Andreas Willisch. 2007. *Exklusion. Die Debatte über die „Überflüssigen"*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Burawoy, Michael. 2015. Soziologie ― going public, going global. Einleitung. In *Public Sociology. Öffentliche Soziologie gegen Marktfundamentalismus und globale Ungleichheit*, Hrsg. Michael Burawoy, Brigitte Aulenbacher und Klaus Dörre, 23-47. Weinheim: Juventa.

Burawoy, Michael, Brigitte Aulenbacher und Klaus Dörre. Hrsg. 2015. *Public Sociology. Öffentliche Soziologie gegen Marktfundamentalismus und globale Ungleichheit*. Weinheim: Juventa.

Conze, Eckart. 2009. *Die Suche nach Sicherheit. Eine Geschichte der Bundesrepublik Deutschland von 1949 bis in die Gegenwart*. München: Siedler.

Dahms, Hans-Joachim. 1994. *Positivismusstreit. Die Auseinandersetzungen der Frankfurter Schule mit dem logischen Posititvismus, dem amerikanischen Pragmatismus und dem kritischen Rationalismus*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

————. 2008. Politisierung der Wissenschaft: Die drei Positivismusstreite. In *Was bleibt vom Positivismusstreit?*, Hrsg. Reinhard Neck, 19–40. Frankfurt a. M.: Peter Lang.

Dahrendorf, Ralf. 1958. Homo Sociologicus. Ein Versuch zur Geschichte, Bedeutung und Kritik der Kategorie der Sozialen Rolle. Josef König zum 65. Geburtstag. In *KZfSS* 10（2）: 178-208, 10（3）: 345-378.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS*, 69（1 Supplement）: 159-214.; veröffentlicht 1959 in Buchform als *Homo sociologicus : ein Versuch zur Geschichte, Bedeutung und Kritik der Kategorie der Sozialen Rolle*. Köln: Westdeutscher.；1973, 橋本和幸訳『ホモ・ソシオロジクス――役割と自由』ミネルヴァ書房 .〕

Diekmann, Andreas und Peter Preisendörfer. 1992. Persönliches Umweltverhalten. Diskrepanzen zwischen Anspruch und Wirklichkeit. In *KZfSS* 44（2）: 226-251.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS* 69（1 Supplement）: 591-617.〕

Dörner, Andreas. 2001. *Politainment. Politik in der medialen Erlebnisgesellschaft*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Dreier, Volker. 2016. Geschichte der Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie. In *Geschichte der deutschsprachigen Soziologie*, Bd. 1, Hrsg. Stephan Moebius und Andrea Ploder. Doi: 10.1007/978-3-658-07998-7_44-1（Zugegriffen: 01.07.2016）.〔Neu gedruckt 2017 als Die Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie. Zur Genese, Struktur und Entwicklung einer soziologischen Fachzeitschrift. In KZfSS, 69（1 Supplement）: 45-59.〕

Esser, Hartmut. 1984. Figurationssoziologie und Methodologischer Individualismus. Zur Methodologie des Ansatzes von Norbert Elias. In *KZfSS* 36（4）: 667-702.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS*

69（1 Supplement）: 455-494.〕

———. 2000. Vorwort. In *Der Wandel nach der Wende. Gesellschaft, Wirtschaft, Politik in Ostdeutschland*, Hrsg. Hartmut Esser, 7–9. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Eßbach, Wolfgang. 1988. *Die Junghegelianer. Soziologie einer Intellektuellengruppe*. München: Fink.

Fischer, Joachim. 2010. Die Rollendebatte – Der Streit um den „Homo sociologicus". In *Soziologische Kontroversen. Eine andere Geschichte der Wissenschaft vom Sozialen*, Hrsg. Georg Kneer und Stephan Moebius, 79–101. Berlin: Suhrkamp.

Foucault, Michel. 1978. Wahrheit und Macht. In *Dispositive der Macht. Michel Foucault. Über Sexualität, Wissen und Wahrheit*, Hrsg. Michel Foucault, 21–54. Berlin: Merve.〔[1976] 1994, Entretien avec Michel Foucault. In Dits et écrits 1954-1988, Tome III: 1976-1979, Paris: Gallimard.：2006, 北山晴一訳「真理と権力」小林康夫ほか編『フーコー・コレクション 4 権力・監禁』筑摩書房 , 326-372.〕

Friedrichs, Jürgen, Jürgen Mayer und Wolfgang Schluchter. 1997. *Einleitung. In Soziologische Theorie und Empirie. Zum 50jährigen Jubiläum des Westdeutschen Verlags*, Hrsg. Jürgen Friedrichs, Jürgen Mayer und Wolfgang Schluchter, VII-X. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Geiger, Theodor. 1934. Natürliche Auslese, soziale Schichtung und das Problem der Generationen. In *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie* 12（2）: 159-183.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS*, 69（1 Supplement）: 121-142.〕

Görtemaker, Manfred. 2009. *Die Berliner Republik. Wiedervereinigung und Neuorientierung*. Berlin: be.bra.

Habermas, Jürgen. 1962. *Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*. Neuwied: Luchterhand.〔細谷貞雄訳，1973『公共性の構造転換』未來社.〕

———. 1981. *Theorie des kommunikativen Handelns*. 2 Bde. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.〔1985-1987, 河上倫逸ほか訳『コミュニケイション的行為の理論』上・中・下 , 未來社 .〕

———. 2006. Ein avantgardistischer Spürsinn für Relevanzen. Was den Intellektuellen auszeichnet. *Blätter für deutsche und internationale Politik* 51:551-557.

Haug, Frigga. 1972. *Kritik der Rollentheorie und ihrer Anwendung in der bürgerlichen deutschen Soziologie*. Frankfurt a. M.: Fischer.

Hauser, Richard. 2010. „Nahblick" und „Weitblick". Erste Schritte zur Erforschung des sozialen und politischen Wandels in den neuen Bundesländern und frühe Prognosen. In *Leben in Ost- und Westdeutschland. Eine sozialwissenschaftliche Bilanz der deutschen Einheit 1990–2010*, Hrsg. Peter Krause und Ilona Ostner, 57-81. Frankfurt a. M.: Campus.

Heitmeyer, Wilhelm. 1997. Einleitung: Auf dem Weg in eine desintegrierte Gesellschaft. In *Was treibt die Gesellschaft auseinander? Bundesrepublik Deutschland: Auf dem Weg von der Konsens- zur Konfliktgesellschaft*, Bd. 1, Hrsg. Wilhelm Heitmeyer, 9-26. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Herbert, Ulrich. 2014. *Geschichte Deutschlands im 20. Jahrhundert*. München: Beck.

Homann, Harald. 1999. Einleitung. In *Friedrich H. Tenbruck. Das Werk Max Webers. Gesammelte Aufsätze zu Max Weber*, Hrsg. Harald Homann, VII-XVIV. Tübingen: Mohr-Siebeck.

Honneth, Axel. 1994. *Desintegration. Bruchstücke einer soziologischen Zeitdiagnose*. Frankfurt a. M.: Fischer.

Joas, Hans. 1978. *Die gegenwärtige Lage der soziologischen Rollentheorie*. 3. erw. Aufl. Wiesbaden: Akademische Verlagsanstalt.

Joas, Hans, und Martin Kohli. Hrsg. 1993. *Der Zusammenbruch der DDR. Soziologische Analysen*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Joas, Hans, und Wolfgang Knöbl. 2004. *Sozialtheorie. Zwanzig einführende Vorlesungen*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Kleining, Gerhard und Harriett Moore. 1968. Soziale Selbsteinstufung（SSE）. Ein Instrument zur Messung sozialer Schichten. In *KZfSS* 20（3）: 502-552.〔Neu gedruckt 2017 in KZfSS, 69（1 Supplement）: 291-333.〕

Kneer, Georg, und Stephan Moebius. 2010. Vorwort. In *Soziologische Kontroversen. Eine andere Geschichte der Wissenschaft vom Sozialen*, Hrsg. Georg Kneer und Stephan Moebius, 7-13.

Berlin: Suhrkamp.

Kohli, Martin. 1985. Die Institutionalisierung des Lebenslaufs. Historische Befunde und theoretische Argumente. In *KZfSS* 37（1）: 1-29.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS* 69（1 Supplement）: 495-524.〕

König, René. 1955. Vorbemerkung des Herausgebers zum Jahrgang VII. *Kölner Zeitschrift für Soziologie* 1-5.

————. 1965. Soziologie als Oppositionswissenschaft und als Gesellschaftskritik. In *Soziologische Orientierungen. Vorträge und Aufsätze*, Hrsg. René König, 17-28. Köln: Kiepenheuer & Witsch.

————. 1967. *Soziologie. Fischer-Lexikon*（Neuausgabe）. 1958. Frankfurt a. M.: Fischer.

————. 2002. Freiheit und Selbstentfremdung in soziologischer Sicht. 1961/62. In *Arbeit und Beruf in der modernen Gesellschaft*, *Schriften* Bd. 16, Hrsg. Hansjürgen Daheim und Dieter Fröhlich, 7-26. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Krause, Peter, und Ilona Ostner. Hrsg. 2010. *Leben in Ost- und Westdeutschland. Eine sozialwissenschaftliche Bilanz der deutschen Einheit 1990–2010*, Frankfurt a. M.: Campus.

Leibfried, Stephan, und Wolfgang Voges. 1992. *Armut im modernen Wohlfahrtsstaat*. *KZfSS*, Sonderheft 32. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Lepsius, Rainer M. 1964. Kritik als Beruf. Zur Soziologie der Intellektuellen. In *KZfSS* 16（1）: 75-91.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS*, 69（1 Supplement）: 229-242.〕

————. 1979. Die Entwicklung der Soziologie nach dem Zweiten Weltkrieg 1945 bis 1967. In *Deutsche Soziologie seit 1945*. *KZfSS*, Sonderheft 21, Hrsg. Günther Lüschen, 25-70. Opladen: Westdeutscher Verlag.

————. 1981. *Soziologie in Deutschland und Österreich 1918–1945*. *KZfSS*, Sonderheft 23, Hrsg. M. Rainer Lepsius. Opladen: Westdeutscher Verlag.

————. 1981a. Die Soziologie der Zwischenkriegszeit: Entwicklungstendenzen und Beurteilungskriterien. In *Soziologie in Deutschland und Österreich 1918–1945*. *KZfSS*, Sonderheft 23, Hrsg. M. Rainer Lepsius, 7-23. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Lessenich, Stephan, und Frank Nullmeier. Hrsg. 2006. *Deutschland – eine gespaltene Gesellschaft*. Frankfurt a. M.: Campus.

Luhmann, Niklas. 1978. Handlungstheorie und Systemtheorie. In *KZfSS* 30（2）: 211-227.〔Neu gedruckt 1981 in *Soziologische Aufklärung*, Bd. 3, *Soziales System, Gesellschaft, Organisation*. Opladen: Westdeutscher Velag, 50-66.; 2017 in *KZfSS*, 69（1 Supplement）: 415-431.〕

————. 1984. *Soziale Systeme. Grundriß einer allgemeinen Theorie*. Frankfurt a.M.: Suhrkamp.〔1993-1995, 佐藤勉監訳『社会システム理論』上・下，恒星社厚生閣 .〕

Lüschen, Günther. 1979. Die Entwicklung der deutschen Soziologie in ihrem Fachschrifttum. Perioden, Sachgebiete und Methode seit 1945. In *Deutsche Soziologie seit 1945*. *KZfSS*, Sonderheft 21, Hrsg. Günther Lüschen, 169–192. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Mannheim, Karl. 1928. Das Problem der Generation. In *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie* 7（2）: 157-185, 7（3）: 309-330.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS*, 69（1 Supplement）: 81-119.；鈴木広訳，1976「世代の問題」樺俊雄監修『マンハイム全集 3 社会学の課題』潮出版社，147-232.〕

Mansel, Jürgen, und Barbara Kaletta. 2009. Desintegrationsprozesse, Anerkennungsprobleme und Gruppenbezogene Menschenfeindlichkeit. Ein Ost-West-Vergleich. In *Deutsche Zustände*. Folge 7, Hrsg. Wilhelm Heitmeyer, 73-92. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Meyer, Thomas. 2001. *Mediokratie. Die Kolonisierung der Politik durch die Medien*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Moebius, Stephan. 2010a. Intellektuellensoziologie – Skizze zu einer Methodologie. *Sozial.Geshcichte* Online 2010/2: 37–63. http://duepublico.uni-duisburg-essen.de/ servlets/ DocumentServlet?id=22136（Zugegriffen: 6.10.2016）.

————. 2010b. Der Medienintellektuelle. In *Diven, Hacker, Spekulanten. Sozialfiguren der Gegenwart*, Hrsg. Stephan Moebius und Markus Schroer, 277-290. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

————. 2015. *René König und die „Kölner Schule“. Eine soziologiegeschichtliche Annäherung*.

Wiesbaden: Springer VS.

———. 2016. Kontroversen in der deutschsprachigen Soziologie nach 1945. In *Handbuch Geschichte der deutschsprachigen Soziologie*, Bd. 1, Hrsg. Stephan Moebius und Andrea Ploder. doi:10.1007/978-3-658-07998-7_20-1.

Moebius, Stephan, und Gerhard Schäfer. Hrsg. 2006. *Soziologie als Gesellschaftskritik: wider den Verlust einer aktuellen Tradition*. Festschrift für Lothar Peter. Hamburg: VSA.

Moebius, Stephan, und Angelika Wetterer. Hrsg. 2011. Symbolische Gewalt. *Österreichischen Zeitschrift für Soziologie* 36: 1-10.

Moebius, Stephan, und Clemens Albrecht. Hrsg. 2014. *Kultur-Soziologie. Klassische Texte der neueren deutschen Kultursoziologie*. Wiesbaden: Springer VS.

Münker, Stefan. 2009. *Emergenz digitaler Öffentlichkeiten. Die Sozialen Medien im Web 2.0.* Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Nachtwey, Oliver. 2016. *Die Abstiegsgesellschaft. Über das Aufbegehren in der regressiven Moderne*. Berlin: Suhrkamp.

Nassehi, Armin. 2015. *Die letzte Stunde der Wahrheit. Warum rechts und links keine Alternativen mehr sind und Gesellschaft ganz anders beschrieben werden muss*. Hamburg: Murmann.

Neidhardt, Friedhelm. 1979. Das innere System sozialer Gruppen. Ansätze zur Gruppensoziologie. In *KZfSS* 31（4）: 639-660.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS* 69（1 Supplement）: 433-454.）〕

———. 1982a. Soziale Bedingungen terroristischen Handelns. Das Beispiel der Baader-Meinhof-Gruppe. In *Analysen zum Terrorismus. Gruppenprozesse*, Bd. 3, Wanda von Baeyer-Katte, Dieter Claessens, Hubert Feger und Friedhelm Neidhardt, 318-392. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Neidhardt, Friedhelm, Wanda von Baeyer-Katte, Dieter Claessens und Hubert Fege. 1982b. *Analysen zum Terrorismus. Gruppenprozesse*, Bd. 3. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Neumann, Michael, und Gerhard Schäfer. 1990. „Blick nach vorn...“: Ein Gespräch mit René König. In *Jahrbuch für Soziologiegeschichte* 1990, Hrsg. Heinz-Jürgen Dahme et al, 219-238. Opladen: Leske & Budrich.

Nickel, Hildegard. 1995. Frauen im Umbruch der Gesellschaft. *Aus Politik und Zeitgeschichte* 36-37: 23-33.

Nolte, Paul. 2000. *Die Ordnung der deutschen Gesellschaft. Selbstentwurf und Selbstbeschreibung im 20. Jahrhundert*. München: Beck.

Opp, Karl-Dieter. 1991. DDR ’89. Zu den Ursachen einer spontanen Revolution. In *KZfSS* 43（2）: 302-331.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS* 69（1 Supplement）: 571-590.〕

Peter, Lothar. 2001. Warum sind die französischen Intellektuellen politisch, die deutschen aber nicht? In *Flexibler Kapitalismus. Analyse, Politik und politische Praxis*, Hrsg. Hans-Jürgen Bieling, Klaus Dörre, Jochen Steinhilber und Hans-Jürgen Urban, 240-251. Hamburg: VSA.

———. 2013. Dialektik der Gesellschaft versus „Conscience Collective“? Zur Kritik Theodor W. Adornos an Émile Durkheim. In *Émile Durkheim*, Hrsg. Tanja Bogusz und Heike Delitz, 73-94. Frankfurt a. M.: Campus.

———. 2016. *Umstrittene Moderne. Soziologische Diskurse und Gesellschaftskritik*. Wiesbaden: Springer VS.

Plessner, Helmuth. 1974. Soziale Rolle und menschliche Natur. 1960. In *Diesseits der Utopie. Ausgewählte Beiträge zur Kultursoziologie*, Hrsg. Helmuth Plessner, 23-35. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Pollack, Detlef. 1990a. Das Ende einer Organisationsgesellschaft. Systemtheoretische Überlegungen zum gesellschaftlichen Umbruch in der DDR. *Zeitschrift für Soziologie* 19: 292-307.

———. 1990b. Wer leitete die „Wende“ ein? Überlegungen zum gesellschaftlichen Umbruch in der DDR aus systemtheoretischer Perspektive. *Sozialwissenschaften und Berufspraxis* 13: 167-177.

Popper, Karl R. 1962. Die Logik der Sozialwissenschaften. In *KZfSS* 14（2）: 233-248.〔Neu gedruckt 1969 in: Theodor W. Adorno, Ralf Dahrendorf, Harald Pilot, Hans Albrecht, Jürgen Habermas und Karl R. Popper. *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie*.

Neuwied: Luchterhand, 103-123.; 2017 in KZfSS, 69（1 Supplement）: 215-228.；[1979] 1992, 浜井修訳「社会科学の論理」テオドール・W・アドルノ／カール・R・ポパーほか『社会科学の論理――ドイツ社会学における実証主義論争』城塚登・浜井修・遠藤克彦 , 新装版 , 河出書房新社 , 109-128.〕

Rauhut, Heiko und Fabian Winter. 2017. Vernetzung und Positionierung der Kölner Zeitschrift für Soziologie（KZfSS）in der länder-, disziplinen- und spachübergreifenden Diskussion. In *KZfSS* 69（1 Supplement）: 61-74.

Rehberg, Karl-Siegbert. 1979. Form und Prozeß. Zu den katalysatorischen Wirkungschancen einer Soziologie aus dem Exil: Norbert Elias. In *Materialien zu Norbert Elias' Zivilisationstheorie*, Hrsg. Peter Gleichmann, Johan Gouldsblom und Hermann Korte, 101-169. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

————. 2000. „Großexperiment" und Erfahrungsschock. Zu einer Forschungsinitiative über das Zusammenwachsen der Deutschen. In *Der Wandel nach der Wende. Gesellschaft, Wirtschaft, Politik in Ostdeutschland*, Hrsg. Hartmut Esser, 11-27. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Ritsert, Jürgen. 2010. Der Positivismusstreit. In *Soziologische Kontroversen. Eine andere Geschichte der Wissenschaft vom Sozialen*, Hrsg. Georg Kneer und Stephan Moebius, 102-130. Berlin: Suhrkamp.

Schäfer, Gerhard. 1996. Soziologie auf dem Vulkan – Zur Stellung René Königs in der Dreieckskonstellation der westdeutschen Nachkriegssoziologie. In *Antifaschismus*, Hrsg. Frank Deppe, Georg Fülberth und Rainer Rilling, 370-387. Heilbronn: Distel.

Schäfers, Bernhard. 1996. Der Vereinigungsprozeß in sozialwissenschaftlichen Deutungsversuchen. In *Soziologie und Gesellschaftsentwicklung. Aufsätze 1966-1996*, Hrsg. Bernhard Schäfers, 181-192. Opladen: Leske & Budrich.

Schelsky, Helmut. 1951. Die Flüchtlingsfamilie. In *KZfSS* 3（2）: 159-177.（Neu gedruckt 2017 in *KZfSS*, 69（1 Supplement）: 143-157.）

————. 1981. *Rückblicke eines „Anti-Soziologen"*. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Scheuch, Erwin K. 1965. Sozialer Wandel und Sozialforschung. Über die Beziehungen zwischen Gesellschaft und empirischer Sozialforschung. In *KZfSS* 17（1）: 1-48.（Neu gedruckt 2017 in KZfSS, 69（1 Supplement）: 243-284.）

————. 2001. Soziologie in Köln. In *Gute Gesellschaft? Verhandlungen des 30. Kongresses der Deutschen Gesellschaft für Soziologie in Köln 2000*. Teil A, Hrsg. Jutta Allmendinger, 113-168. Opladen: Leske & Budrich.

Schildt, Axel, und Detlef Siegfried. 2009. *Deutsche Kulturgeschichte. Die Bundesrepublik von 1945 bis zur Gegenwart*. München: Hanser.

Schimank, Uwe. 1988. Gesellschaftliche Teilsysteme als Akteurfiktionen. In *KZfSS* 40（4）: 619-639.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS* 69（1 Supplement）: 549-569.〕

———— . 2000. Soziologische Gegenwartsdiagnosen – Zur Einführung. In *Soziologische Gegenwartsdiagnosen I: Eine Bestandsaufnahme*, Hrsg. Uwe Schimank und Ute Volkmann, 9-22. Opladen: Leske & Budrich.

Schluchter, Wolfgang. 1996. *Neubeginn durch Anpassung? Studien zum ostdeutschen Übergang*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

Schmid, Michael. 2004. *Rationales Handeln und soziale Prozesse*. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Schultheis, Franz, und Kristina Schulz. Hrsg. 2005. *Gesellschaft mit begrenzter Haftung: Zumutungen und Leiden im deutschen Alltag*. Konstanz: UVK.

Sloterdijk, Peter. 2009. Die Revolution der gebenden Hand. In *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 13. Juni 2009, online: http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/debatten/kapitalismus/die-zukunft-deskapitalismus-8-die-revolution-der-gebenden-hand-1812362.html（Zugegriffen: 11.10.2016）.

Streeck, Wolfgang. 1987. Vielfalt und Interdependenz. Überlegungen zur Rolle von intermediären Organisationen in sich ändernden Umwelten. In *KZfSS* 39（3）: 417-459.〔Neu gedruckt

2017 in *KZfSS* 69（1 Supplement）: 525-548.〕
———. 2008. Korporatismus. In *Handbuch der Politischen Philosophie und Sozialphilosophie*, Bd. 1, Hrsg. Stefan Gosepath, Wilfried Hinsch und Beate Rössler, 655-658. Berlin: de Gruyter.
Tenbruck, Friedrich H. 1975. Das Werk Max Webers. In *KZfSS* 27（4）: 663-702.〔Neu gedruckt　2017 in *KZfSS*, 69（1 Supplement）: 375-413.；1997, 住谷一彦・小林純・山田正範訳「マックス・ヴェーバーの業績Ⅰ」『マックス・ヴェーバーの業績』未來社 , 11-94.〕
Thierse, Wolfgang. 1994. Fremde im eigenen Land. Nach der Einheit die Entfremdung? In *Perspektiven für Deutschland*, Hrsg. Warnfried Dettling, 51–61. München: Knaur.
Volkmann, Ute. 2015. Soziologische Zeitdiagnostik. Eine wissenssoziologische Ortsbestimmung. Soziologie. *Forum der Deutschen Gesellschaft für Soziologie* 44: 139-152.
Weyer, Johannes. 1986. Der „Bürgerkrieg in der Soziologie". Die westdeutsche Soziologie zwischen Amerikanisierung und Restauration. In *Ordnung und Theorie. Beiträge zur Geschichte der Soziologie in Deutschland*, Hrsg. Sven Papcke, 280-304. Darmstadt: WBG.
Wielgohs, Jan, und Marianne Schulz. 1993. Von der „friedlichen Revolution" in die politische Normalität. Entwicklungsprobleme der ostdeutschen Bürgerbewegung. In *Der Zusammenbruch der DDR. Soziologische Analysen,* Hrsg. Hans Joas und Martin Kohli, 222-245. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.
Wiese, Leopold von. 1921. Zur Einführung: Die gegenwärtigen Aufgaben einer deutschen Zeitschrift für Soziologie. *Kölner Vierteljahrshefte für Sozialwissenschaften, Reihe A: Soziologische Hefte* 1（1）: 5-11.〔Neu gedruckt 2017 in *KZfSS*, 69（1 Supplement）: 75-80.〕
Windolf, Paul. Hrsg. 2005. *Finanzmarkt-Kapitalismus. Analysen zum Wandel von Produktionsregimen*, Sonderheft 45/2005 der *KZfSS*. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
Wolfrum, Edgar. 2013. *Rot-Grün an der Macht. Deutschland 1998–2005*. München: Beck.
Zapf, Wolfgang. 1991a. Modernisierung und Modernisierungstheorien. In *Die Modernisierung moderner Gesellschaften: Verhandlungen des 25. Deutschen Soziologentages in Frankfurt am Main 1990*, Hrsg. Wolfgang Zapf, 23-39. Frankfurt a. M.: Campus.
———. 1991b. Die DDR 1989/1990 – Zusammenbruch einer Sozialstruktur? *Berliner Journal für Soziologie* 1: 147-155.

訳者付記

本稿は、Stephan Moebius, 2017, »Die Geschichte der Soziologie im Spiegel der Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie（KZfSS）«, in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 69（1 Supplement）[Sonderheft 56]: 3-44. の全 13 節中、7 節以下の翻訳である。6 節までの翻訳に当たる（上）は、『京都社会学年報』26 号に掲載されている。原論文の概要および著者については、（上）の付記を参照のこと。

この翻訳は、JSPS 科研費 17J08728, 19K13912 の助成を受けた研究成果の一部である。

（うめむら　むぎお・日本学術振興会特別研究員 PD）